

## 第一章 夏至の夜

あなたが今いるところから、はるか彼方の湖のそばに立っているのは、一本のカシの木。

そのカシの木の幹に巻きついているのは一本の金の鎖。

その鎖につながれているのは一匹の猫。それも世界中でいちばん物知りの猫。猫がいつもぐるぐる歩きまわっているのは、一本のカシの木のまわり。

あちらにいては歌い、

こちらにきては語る。

その猫の語る話のひとつが、これ。

これは（と猫は語る）、はるか遠く、皇帝のおさめている北の国の話。その国では、明るい夏が一年の半分、暗い冬が一年の半分。

これから不思議な話をしよう。夏がきて冬がきて、地球は回転する。夏はとても短い、夏の間、日はとても長い。まぶしい一日はたえまなく次の日に流れこみ、太陽は真夜中でも輝いている。

ところが冬はとても長く、日々、日が短くなって行って、ついに真昼でも暗く、雪におおわれた大地の上にはすべてを凍りつかせる黒い空がのしかかる。その空には無数のまばゆく輝く星が散らばり、白い、白い月が出る。

この話は（と猫は語る）、この寒い荒野で始まる。そこでは積もった雪から立ちのぼった月の光が闇を半分溶かして銀の霧に変える。この話は、マリュータという猟師がひとりで雪原を歩きながら、仕掛けた罠に獲物がかかっているか確かめているところから始まる。

マリュータの左足は長いスキーに、右脚は短いスキーにくくりつけてある。手袋をはめた片方の手に持った弓を棹がわりに体を前に押し出すようにして、雪原を滑っていく。風がその顔に氷の結晶を吹きつけ、大きな毛皮のフードの縁をはためかせ、うならせる。その悲しい、悲しい歌をきくと、マリュータは何キロも離れた村や、友だちや妻のことに思いをはせる。

村も、仲間も、妻も、おれのことを忘れてしまっているだろう。こんなに寒く、何も無い場所では、自分のことを思い出すのもむつかしい。マリュータは自分が幽霊のような気がした。もう死んで風の声に乗り、果てしなく寒い闇のなかを風のように飛んでいるような気がする。

冬の続く何ヶ月かの間ずっとストーブのまわりで暖まっている男たちもいるが、マリュータはちがう。マリュータは皇帝の奴隷で――皇帝などみたこともなかったが――皇帝は

毛皮を欲している。黒くて柔らかいクロテンの毛皮、白くて柔らかく尻尾の先だけ黒いオコジョの毛皮、オオカミやオオヤマネコの毛皮、マントや部屋履きの内側に縫いつけるビーバーの毛皮。皇帝がそういった毛皮を欲するのは、そういった毛皮を身にまとうと、本物の皇帝になったような気になれるからだ。そしてそういった毛皮を臣下に与えてやれば、本物の皇帝だと思ってもらえるからだった。

そんな皇帝の望みをかなえるために、マリュータは毎年冬になると家族を置いて家を空け、そういった動物を狩りに出かけなくてはならなかった。罾にかけて、仕留め、皮をはぐ。マリュータは皇帝の狩人だった。

ある日のこと（と猫は語る）、仕掛けた罾のなかに、死んだクロテンがかかっていた。マリュータはスキーから足をはずすと、雪のなかでしゃがみ、かたく凍りついた小さな死骸をみた。死んだときのまま体をよじらせたクロテンの首には紐が食いこんでいる。うっすら光る雪の上に転がった死骸は信じられないほど黒く――光ともいえない、とぼしい光のなかでも――白い雪と黒い毛に散った血はあざやかに目に映った。

「最初の息子は」マリュータは、氷柱のたれ下がったもっさりしたひげの下からいった。もうすぐ、子どもが生まれるのだ。

「……最初の息子は――黒い、黒い髪の子がいい。母親の髪のように黒く、このクロテンの毛のように黒い髪の子がいい。肌も歯も、この雪のように白く、唇も頬も体のなかを流れる血のように、雪に散った血のように赤い子がほしい……黒くて、白くて、赤い息子。クロテンのような、雪のような、血のような息子がほしい」

マリュータは望みを声に出していった――その場で、その寒さのなかで、闇のなかで、ちらちら光る何もない雪原で――その言葉がどこまでも風に乗っていく雪原で。マリュータは自分の仕掛けた罾にかかって死んだクロテンの上で望みを口にしたが、その怒った霊をなだめる言葉はひと言もかけてやらなかった。クロテンはいつも怒りと不安を抱えて飢えているというのに。

そのような願いを言葉にするのは決して賢いことではないが、それを、こんな場所で、こんな獲物の前で口にするのは、災いを招くようなものだ。

しかし、人間がどんな災いを自ら招こうとも、地球は回り続ける。そして回るうちに、日は長くなり、夜は短くなる。長い冬の夜が砕けて、短く薄明るい日々が変わっていくと、マリュータはテントと凍った毛皮を橇に乗せてトナカイに引かせ、青い目の毛むくじゃらの犬を数匹従えて、雪原の上を、都へ、皇帝の倉庫へ向かった。そして毛皮をおさめると、かわりに食べ物や着る物をもらい、役目を終えて、村にもどっていった。

マリュータは犬といっしょに橇の横を走った。橇に乗ればそのぶん重くなって、帰るのが遅くなるからだ。解けかけた雪の上を、橇を引いて走るトナカイを手伝ってやった。もっと速く、もっと速く！ 頭のなかも、心のなかも、イエフロシニアのことでいっぱいだった。マリュータはつい一年前、イエフロシニアと結婚したばかりだったのだ。

マリュータは若くもなければ顔立ちもよくもなく、奴隷だったので貧しかった。だから長いこと結婚しないままだったし、わが家と呼べるところもなかった。冬はひとりで過ごし、短い夏は皇帝の持っている村で過ごした。皇帝の狩人として、そこでの寝泊まりが許されていたのだ。しかし、長い、長い間ずっと、妻と子どもがほしかった。狩人に妻がいなくてどうする。冬の闇のなかに出ているとき、妻がいなければ、自分のことを思ってくれる人はいない。ふたたび夏になったとき、家の火明かりのなかを迎え入れてくれる人はいない。奴隷に子どもがいなくてどうする。奴隷が自分のものといえるのは、子どもだけなのだから。

しかし、マリュータは女の人に向かって結婚してほしいという勇気はなかった。そしてイエフロシニアと出会った。マリュータは若くなかったが、イエフロシニアも若くなかった。マリュータは顔立ちがよくなかったが、イエフロシニアも顔立ちがよくなかった。マリュータは何も持っていなかったし、イエフロシニアは不細工で、皇帝の土地で働く奴隷の長女だったので、それ以下とってよかった。そこでマリュータは、妻になってほしいといい、イエフロシニアは、喜んで、と返事をした。

そんなわけで、雪解けのぬかるんだ道をマリュータが橇を引いて村にもどってくると、イエフロシニアが大きなショールを体に巻いて待っていた。イエフロシニアがせいっぱい美しく――黒く長い髪と、黒い瞳で――雪のなかに立つその姿をみて、マリュータは美しいと思った。一方、イエフロシニアはマリュータの大きな四角い顔と、もっさりした金色のひげと、もっさりした巻き毛をみて、四角い顔をした毛むくじゃらのテリア犬みたいだと思った。そして、こちらに走ってくるマリュータが吠えるんじゃないかと思った。

「いい知らせがあるのよ、わたしの大きなワンちゃん」イエフロシニアはマリュータのひげを引っぱっていった。「もうすぐ子どもが生まれるの」

マリュータは妻を抱きしめてキスした。そしてその晩は、思い切り酒を飲んで、帰宅と、生まれてくる赤ん坊のために乾杯した。赤ん坊は男の子だとわかっていた。黒くて、赤くて、白い息子だとわかっていたのだ。

夏がやってきた。短く暑い夏だ。太陽の熱がやさしく肌をなでる。子どもたちは裸で、村の土埃の立つ道を走り、犬は身を伏せてあえぎ、猫は丸くなって日向ぼっこをしている。女たちはショールを取り、靴下を脱いだ。働く男たちはシャツを脱ぎ、日光がその肌から水分を吸い上げて、男たちの肌を焼いて革のようにしてしまう。

時間が限られていることを知っている、明るい、明るい緑の草が大地から芽を伸ばす。木には泡のように花が咲き乱れ、そのなかを蜂が飛び交う。花々が花びらを広げ、すべての小道を、すべての小川を縁取り、家の屋根までおおってしまう。畑では、野菜が緑の葉を広げ、ライ麦がひげを生やす。

羊が子を産み、牛が子を産み、鳥が巣を作って卵を産む。小川では小魚が群れる。この暑く生き生きとした時季、だれひとり、マリュータでさえ、冬がどんなに寒く、暗く、不毛だったか、思い出すことはできなかった。

そんなとき、イエフロシニアとマリュータの子どもが生まれた。それも深夜、夏至の日、一年でもっとも長い日で、一瞬たりとも闇が顔を出さない日だった。

家の男たちは、その白夜の日、外に座らされて、赤ん坊が産まれるのを待った。粗末な家の前に置かれた木の長椅子に腰かけ、酒を飲み、声を上げて笑い、子どものいる男たちは自分の子の誕生と赤ん坊の頃の話をした。マリュータもそのなかに座って顔を赤らめ、もうすぐやっと父親になれることを自慢に思っていたが、何か恐ろしいことが起こるのではないか、イエフロシニアか赤ん坊が死ぬのではないかと、びくびくしていた。

そのうち女がにこにこして入り口から出て来ると、男たちを呼び入れた。マリュータはまっ先に立ち上がり、まっ先に家に飛びこんだ。そしてまっすぐベッドのところに行く、間の抜けた大きな笑みを顔に浮かべ、目に涙を浮かべた。目の前では、イエフロシニアが元気そうに、マリュータをみてほほえんでいる。マリュータは妻に痛い思いをさせないよう、ゆっくりベッドの端に座ると、妻にキスをして、愛と感謝を伝えた。

イエフロシニアの母親がそばにやってきて、両腕に抱えた赤ん坊をマリュータに差し渡し、「男の子よ」といった。マリュータは目を見開いて、母親をみた。

喜びと、恐れと、驚きに震えながら、マリュータは赤ん坊を両手で受けとった。その子の顔は赤く醜く、頭には黒い毛が綿のように生えていた。そっと、とてもそっと、ゆっくりと、マリュータは大きくて不細工な顔を下げて、赤ん坊の額にキスした。赤ん坊は、ひげで顔がちくちくして泣きだし、まわりの人たちは声を上げて笑った。大きな笑い声が木の家に響いた。

その笑い声にびっくりして、マリュータは顔を上げた。目には涙が浮かんでいる。それから自分も笑い、赤ん坊を妻のそばに置いた。それから妻の手を取って、妻の顔をみたが、何もいえず、首を振るばかりだ。その顔を涙が流れている。妻もほほえんだ。疲れてはいたが、大きなテリア犬が幸せそうなのがよくわかった。

奴隷が自分のものといえるのは子どもだけだ。マリュータは、財布に初めてコインを一枚入れてもらったような気がした。

その日は夏至で、闇が訪れて人々をベッドに追いやることはなかった。だれもが赤ん坊の誕生を祝った。木のコップや皿を持ってきて、ビールを注ぎ、近所の仲間を連れてきた。近所の仲間は食べ物を持ってやってきた。さんざん食べて、さんざん飲んで、イエフロシニアとマリュータと生まれたばかりの赤ん坊に乾杯した。マリュータは赤ん坊を、ひとりひとりの前に持って行ってみせた。マリュータの赤い顔は、父親になった喜びで輝いていた。この世に息子を残さないで死んでいくのかもしれないと思っていた頃やっと、この子が生まれたのだ。

こんなふうにして夏至の日は過ぎていった。もちろん夜がやってきたが、それは朝と同じくらいまぶしかった。集まった人々は疲れきって眠くなると、窓をよろい戸でおおって、家のなかを暗くしなくてはならなかった。

やがてみんな眠ってしまい、マリュータひとりが残った。あれほど酒を飲んだのに、眠れなかった。うれしくてたまらず、怖くてたまらなかったのだ。

家のなかは暗かった。夏の光がよろい戸の隙間から差しこんで、埃がちらつく光の柱を作っていたので、家のなかの影がいつそう黒々とみえた。そのうえ暑くて、熱のせいで木の壁のにおいが漂い、それがビールや食べ物のおいと混じり合っていた。

マリュータは妻のベッドの端に座って、妻と赤ん坊が眠っているのをながめていた。マリュータは毛むくじゃらの脚をさらしていた。寝たくはなかったが、それでも寝るつもりだったので、着ていた物は脱いで、シャツ一枚の格好だった。長いこと、とりとめもないことを考えていた。

何度も何度も、赤ん坊の上にかがみこんでは息を止め、息子がちゃんと息をしているのを確かめた。こんなに小さな、生まれたての子どもが自分で呼吸をしているのが信じられなかった。

これでほしいものはすべて手に入った。マリュータはそういってみて、驚き、怖くなった。おれはもうこの村で寝泊まりするだけの孤独な旅人ではなくなった。妻もいるし、息子もいる。この村の一員だ。ここは自分の村だ。なぜなら、ここは妻の村だし、息子が生まれた村だからな。自慢の子がいて、これから先もそうだ！ もう黒い髪を生やしている。黒く、白く、赤くなる。クロテン、雪、血――きっと、腕のいい狩人になって、おれを手伝ってくれるだろう。父親よりずっと男前になって、女たちはだれもが気を引かれる。おれがいろいろ教えて、雪が一メートル半ほど降り積もっても生きていけるように仕込んでやる。そしておれがこの世を去るときには、この子が残って、おれの後を継いで、自分の人生を生きていけよう。「ああ、おまえたちのおじいさんはな」この子は自分の子どもたちにいうだろう。「マリュータじいさんは、じつに立派な人だったんだ！」

マリュータはもう一度かがんで、赤ん坊が息をしているかどうか確かめた。その小さな体は頭から足まで、自分の腕の長さほどもない。赤ん坊の小さな口や鼻は、マリュータの大きな口や鼻と同じように息をしている。それに小さな目は閉じている。小さな手、それに――先にいくともっと小さくなる――小さな指、それよりもっと小さな、かわいい爪。この小さな子が、自分と同じくらい大きく育つのだ！

今なら、マリュータは教会でみんなのいっていたことが信じられる気がした。水はワインに変わり、パンが五つに、魚が二匹あれば、五千人を食べさせることができる。もし妻やおれのような平凡な人間からこんな息子が生まれてくるなら、そんな奇跡だって信じることができる。

そのとき、マリュータは飛びあがった。家の外のドアをたたく音がしたのだ。まるで、木のドアを太い棒の端でなぐりつけるような音だった。その鈍い音は木の家の壁の間で反響した。マリュータはいらいらしてベッドから立ち上がった。その音で妻や赤ん坊が起きるかもしれないと思ったのだ。だが、家のなかで寝ている人々はだれひとり、ぴくりともしなかった。最初の音の響きがおさまらないうちに二度目、三度目の音がしたが、だれも起きない。

マリュータは手をのばしてズボンを取り、ベルトに下げた鞘から大きなナイフを抜いて、ドアのほうに歩いていった。おそらく近所の者だろうとは思ったものの、妻と生まれたばかりの赤ん坊のことがいとおしく、心配でもあったせいで、ふたりの身に何かあったらと考えると、気になってしょうがなくなるのだ。

暗い家のドアを開けたとたん、夏至の深夜の強烈な白い光に目がくらんだ。片手をかざして、その下から目をこらすと、外に男が立っていた。明るい光を背景に大きな体が黒い影になっている。マリュータが何か考えたり話したりするまえに、男は素早く、堂々と向かってきた。マリュータは思わず後ずさり、男は家に入ってきた。マリュータはナイフをかまえてさっとふり向いたが、今度は、よろい戸をおろした暑い部屋の闇に、また目がくらんだ。

「だれだ」マリュータは、暑い闇にたずねた。「なんの用だ」

部屋のまん中にみたことのない男が立っている。その男は肩にかけていた物を取ると、床に落とした。軽い音が響く。それは楕円形の平たい太鼓で、張ってある革には奇妙な赤い模様が描かれている。マリュータは心臓が飛びあがるのがわかった。ゴーストドラム。魔法使いの太鼓だ。

マリュータは、よくみようと男のほうに歩いていった。靴下もはいていない汗ばんだ足が木の床板を踏むとペタッペタッと音がして、床板から離れるとちゅっと音がした。男はじっと立ったまま、マリュータが近づくのをながめて笑っている。

白髪まじりの豊かな黒い髪とひげに囲まれた、細長い顔には深いしわがきざまれている。笑うと、大きな白い歯がのぞいて、顔中に細かいしわができる。この夏至の暑さのなかで、冬の格好をしている。まだ寒いのは北の国から、ふいにやってきたかのようだ。肩にかけている皮はひだになって、ずっしり重く、やわらかそうで、悪臭を放っている。黄ばんだシロクマの毛皮だ。その頭は逆さまになって男の背中にぶらさがっている。長く黒い爪のついた前足は、男の両脇にたれている。男の体を包んでいるトナカイの皮で作ったズボンとチュニックには、骨とビーズと、羽根と真鍮の輪の飾りがついている。そのうえ奇怪な模様が刺繍されているので、その幾重にもからみ合った模様を疲れた目でみたマリュータはめまいを覚えた。足には、刺繍をほどこしたラップランド風のブーツ、手にはラップランド風のミトン。夜の魔法使いだ。外で太陽がどんなに明るく輝いていようと、今は夜、白夜。あと一時間で夏至の日が終わろうとしている。

「わしの子どもをもらいにきた」男がいった。

「どの子です」マリュータはたずねたが、その答えはわかっていたし、その答えを恐れてもいた。

魔法使いは、イエフロシニアの寝ているベッドのほうを向いた。その重いブーツの足音が、シロクマの足音のように床に柔らかく響く。しかし、マリュータのほうに飛びだして赤ん坊を抱きあげた。

「おれの息子だ」マリュータがいった。「おれの息子だ」マリュータはそういいながら魔法使いの細長い顔を見た。開いたままのドアからまぶしい日の光が差しこみ、家のなかに草の香りを乗せたそよ風が吹きこんでいる。マリュータは、はっとした。これは夢だ。起きているときに魔法使いをみたことなど一度もない。なら、この魔法使いに息子を渡してやろう。夢なら、問題はない。

しかし、そんな恐ろしい夢をみたときは、必ず目が覚めた。夢のなかで、野生のシロクマのこんなにいやなおいをかぐことがあるだろうか。夢で、日差しがこんなに明るく、こんなに熱く、魔法使いの顔を照らすことがあるだろうか。魔法使いのしゃがれた声がこんなふうに耳に響くことがあるだろうか。

魔法使いは顔を突き出して、マリュータの目を、クマのように黒い目でみつめた。「わしの弟子が生まれた。わしの子だ。それをよこせ」

マリュータは首を振った。

魔法使いはにやっと笑った。いずれ自分の思うがままになるとわかっている者の笑いだ。「おまえがその子を手元に置いて育てれば、皇帝の奴隷になるだけだ。働いて、苦しんで、何年かのうちに死んでしまう。わしに渡せば、皇帝より自由になれる。わしにその子に、

死の国へいく道も、死の国からもどる道も教えてやり、魔法使いにしてやる。三百年の寿命をやろう。もしおまえが自分よりもこの子を愛しているのなら、わしによこすがいい」

「いやだ」

「わしによこせ。非難されることもないし、罰せられることもない。その子の代わりに、土で作った赤ん坊をやる。おまえは、赤ん坊は死んだといえればいい」

「罰せられたってかまうもんか。おれはこの息子を手放したくない！」

「女は男ほど自分勝手ではない。おまえの妻なら、その子をわしに渡すだろう」

「妻は寝かせておいてくれ！ おれは男だ、いたいことをいう。もし自分の息子を手元に置いて守ってやるのが自分勝手だというなら、おれは自分勝手だ。息子がほしいなら、自分でつくればいい！」

魔法使いはため息をついて背を向けると、部屋の奥にある木の長椅子のほうに歩いていった。まぶしい光の細い柱のなかを通って、深い闇のなかを通っていくと、重いブーツが床を踏む音と、シロクマの爪が鳴る音が響いた。シロクマの毛皮の裾が床をなでて、かすかなささやきのような音を立て、シロクマのいやなにおいがマリュータの鼻先まで漂ってくる。魔法使いのチュニクのビーズや真鍮の輪が触れあって音を立て、開いたままのドアからは夏の花の香りが吹きこみ、白くまぶしい光が影を隅に追いやっている。

「われわれから生まれた子どもは、われわれのものではないのだ」魔法使いはいった。「魔法使いはそれを知っている。死者の世界から、われわれの教えを受けつぐべく、この世に生まれ変わった者のみが、われわれの子なのだ。どんな男女の間に生まれたものであろうとな……わが友よ、死者の世界には、鉄の森があって、そこに踏みこむと魔法使い以外の者は迷ってしまう……そして鉄の森の中心には鉄のトネリコの木が生えている。この木は巨大で、その枝には様々な動物が住み、そこをこの世界と同じくらい自由に行き来している。その木に巣を作って、この世に生まれ変わるのを待っている魔法使いたちは、そういった動物を食べて生きている。その木を駆けまわっているクロテンたちが、わしに、わしの弟子が生まれたと知らせてくれたのだ」

「クロテンだって」マリュータは息を飲んだ。

魔法使いはうなずいた。「おまえが抱いている子は、すでにわれわれの仲間なのだ。ふたたびわれわれの仲間となるべく、生まれ変わった。その子はわしの弟子だ。その子が新たな生の日を過ごさないうちに、連れていかねばならない。だから、その子を渡してほしい」

魔法使いからクロテンたちのことをきいた瞬間、マリュータは体が震えた。畏にかかって死んだクロテンの上にかがんで、望みを口にしたときのことを思い出したのだ。魔法使いへの恐怖がさらに増した。「いやだ！」



魔法使いはかっとなって木の長椅子から立ち上がると、杖で床をたたきながらマリュータの前までやってきた。木と木のぶつかる音が大きく響く。マリュータは赤ん坊を抱いたまま後ずさった。

「わしは二百三十四歳だ。二百年間、この子が生まれるのを待っていた。わしの子が生まれるのをな！ わしは三つの魔法を自在に使える。氷のリンゴを摘むことができる。癒やすこともできれば、傷つけることもできる。そういったことすべてを教えてやることができる。おまえは、いったい何を教えてやれる」

マリュータは壁に背中を押しつけながらいった。「狩りを教えてやれる」

「それだけか。クマのように獲物を狩ることを教えてやれるとでもいうのか。いいから、その子をよこせ」

「クマを狩ることを教えてやれる！」マリュータは片手で赤ん坊を抱き、もう片方の手で魔法使いを押しやった。「この子が大きくなるまで、おれはこの子の屋根になり、この子の火になり、この子を守る犬になり、夜から守る壁になってやる。この子は絶対に、夜やってくる、死者の世界の魔法使いには渡さない！」

魔法使いは大きな仕草で背を向けると、木の長椅子までもどった。「あと一時間で、わしはいかねばならない。市場で取り引きするように話し合おう、マリュータ——そう、わしはおまえの名前を知っている。その子の代わりに何がほしい。その子よりほしいものがあるだろう。金持ちになりたくはないか、マリュータ？ 自分と妻の自由を買えるくらいの金がほしくはないか。自由の身になれば、仕留めた獣の皮を売って、金を貯めることができるし、そうなれば、この子の代わりに十人ほどの息子が持てるぞ！」

マリュータはなぐりつけられたような気がした。この魔法使いにはそれができるとがわかったからだ。この男はおれを自由に、金持ちにすることができる。それどころか、どんな望みでもかなえてくれるだろう。この腕に抱いている赤ん坊を——ただの赤ん坊をひとり——差しだしさえすれば。赤ん坊なんて、この世界にはいくらでもいる。マリュータは赤ん坊を差しだそうと腕が動きかけたのに気づき、甘い言葉につられそうになった自分に腹を立てて叫んだ。「おれは皇帝じゃない、自分の子どもを売り買いするなんてまっぴらだ！ おれだって長いこと——今か今かと——待ってたんだ。この子が生まれるのをな。何をもらおうと、この子を売ったりするもんか！ もし、皇帝にしてやるといわれても渡さない！」

「ほう、それが望みか」クズマがきいた。「皇帝になりたいのか？」

マリュータは口を開けたまま、凍りついた。心臓が止まりそうだった。このおれが皇帝に、地上の神になって、すべてを所有し、すべてを治める？ しかし、マリュータは何もいわなかった。

「若返ることもできるぞ」

マリュータは息を飲んだ。その申し出に、喉がつかえて言葉が出なかったのだ。魔法使いはにやっと笑った。相手の気持ちがぐらついたのがわかったのだ。ところがマリュータは天井の梁を照らす真夜中の陽光をみた。梁からたれ下がったクモの巣が虹色に光っている。それから、質素な木の長椅子に腰かけている北の魔法使いをみて、床に差す光の柱のなかに転がっているゴーストドラムをみた。外では、牛が鳴き、小鳥がさえずり、どの光景にも、どの音や声にも、夢の強い香りが立ちこめている。なら、魔法使いの約束などどうだっていい。「何をもらっても、息子は渡さない」

魔法使いも、開いているドアに目をやった。真夜中の陽光が強くなってきた。魔法使いは立ち上がり、マリュータのほうに歩いていった。ブーツが柔らかい音を立て、シロクマの毛皮がささやき、いやなおいを暑い部屋のなかにまき散らす。「その子を手放さないのは、その子が幸福をもらたすと思っているからだだろう。だが、いっておく、絶対にそんなことはない！ おまえが腕に抱えているのは、苦しみだ！ その子は魔法使いだ、世界を渡り歩く者だ、鉄のトネリコの子だ。奴隷の息子として、ひとつの世界にしばられて生きるように生まれた者ではない。いいか、くず同然のおまえにいっておいてやる。もしその子を手元に置いておけば、おまえは自分の最も大切なものをすべて失うことになるぞ。冬の闇のように黒く、氷のように白く、血のように赤く、クロテンの歯のように鋭いのだ、その子は！ その子はおまえに災いをもらたす！」

マリュータはぞっとして叫んだ。「おれを呪うな！」

「未来を語っているだけだ。呪ってなどいない。その子を渡せ！」

「いやだ」マリュータはもう一度、ドアのほうをみた。光がますます強くなっている。「絶対に渡すもんか。夢のなかでだって、いやだ。起きているときだって、いやだ。何を約束されても、どんなに頼まれても、どんなに呪われても、いやなものはいやだ。この子のためにも、おれのためにも、この子の母親のためにも、渡さない。これはおれの息子だ。おれが育てる」

「渡せ！」魔法使いは声を張りあげると、ミトンをはめたごつい両の手でマリュータの肩をつかんだ。顔が怒りでゆがんでいる。

「いやだ！」

魔法使いは両手で赤ん坊をつかんだ。「わしに、わしによこせ！」

「頭をもぎ取られても、この子は渡さない」

魔法使いは赤ん坊から手を離して後ずさった。部屋で寝ていた人々がもぞもぞ動きだして、ため息をついた。夏至の最後の瞬間だ。

「わしは二百年待った」クズマがいった。「おまえはまた子どもができる。わしにはこれが最後なのだ。この子をわしによこせ」

「いやだ」

夏至の日が終わった。魔法使いはかがんで、床からゴーストドラムを拾い上げた。そしてシロクマの爪のついた分厚いブーツで床を踏みしめながら、ドアから出ていった。

マリュータは赤ん坊を自分の肩まで持ちあげると、ひげの生えた頬を赤ん坊の柔らかい頬にすりつけた。ほっとしたマリュータの顔を涙が流れている。

まわりでは、寝ていた人々が目を覚まし、毛布を払いのけて体を起こしている。マリュータは自分が起きているのか、眠っているのか、夢をみているのか、わからなかった。

「マリュータが赤ん坊をあやしているぞ！」みんなが口々にいった。「おおい、ひと晩中その子のお守りをしていたのか、マリュータ。赤ん坊が腹をすかせたようだぞ！」赤ん坊が目を覚まして、マリュータの耳元で大きな泣き声を上げた。

マリュータは何もいわなかった。頭が重く、ぼんやりしている。自分は眠りのなかで夢をみていたのだ。それも悪い夢を。聞き覚えのない声が、しつこく迫ってきて、板壁で囲まれた部屋じゅうの埃を震わせている。しかし、マリュータは、その声が何をいったのか思い出すことはできなかった。そして息子を妻の横に置くと、自分もいっしょに横になって寝た。

アンブロージ、マリュータはまどろみながら、思いついた。この子をアンブロージと呼ぶことにしよう。「不死」という意味だ。そう、おれの息子は不死だ。おれにとっては完璧な息子だ。この子は永遠に生きる。

これが（と猫は語る）、皇帝の狩人だったマリュータが、シロクマの魔法使いと張り合い、魔法使いの弟子を渡すのをこぼんだときの話だ。

魔法使いを敵にまわすと（と猫は語る）、決して幸福にはなれない。

※本原稿は翻訳作業中のもので、完成版とは異なる部分もございます。あらかじめご了承ください。

[『ゴーストソング』『ゴーストダンス』翻訳出版プロジェクトへのご参加はこちらから](#)